

聾保交流保育の取り組みに関する一考察

幼児のかかわりの変容に着目して

原子 はるみ

函館短期大学保育学科

KEY WORDS: 自由遊び、園児の変容、保育者の学び

【目的】

幼稚園教育要領(平成20年)第3章2(3)には「幼児の社会性や豊かな人間性をはぐくむため、地域や幼稚園の実態等により、特別支援学校などの障害のある幼児との活動を共にする機会を積極的に設けるよう配慮すること」と明記されている。

また、特別支援学校幼稚部教育要領(平成21年)第3章第1の11では「幼児の経験を広めて、積極的な態度を養い社会性や豊かな人間性を育むためには、学校生活全体を通じて、幼稚園の幼児などと活動を共にすることを計画的、組織的に行うとともに、地域の人々などと活動を共にする機会を積極的に設けること」と記されている。障害のある幼児と就学前施設の園児の双方に活動を共にする機会の設定を挙げている。これらを受け、特別支援学校の幼稚部と地域の幼稚園・保育所が様々な形態で交流保育を実践していることが増えた。

交流保育の方法には、通常保育における交流、行事、イベントにおける交流等、形態や回数は様々である。交流保育のねらいは「障害児の経験を広げ、社会性を養い、好ましい人間関係を育てる」等の障がいのある幼児に視点が置かれていることが多く、障害のある幼児の変容を述べた先行研究が多く見られる。保育は環境を通し幼児の相互作用により成り立つ教育活動である。障害のある幼児との交流を実施することによって園児がどのような変容をしているかを知ることは重要であるが、取り上げている研究は多くない。

本研究では保育所と隣接する特別支援学校幼稚部との交流保育を通し、障がいのある幼児とのかかわりが園児にどのような影響を与えているのか、その変容に着目し考察する。

【方法】

A 聾学校幼稚部とB保育園における3年間の交流保育の観察と双方の保育者の交流後の記録とインタビューを基に保育園児の変容や影響を分析した。園児同士の相互作用を調べるために、場面見本法により交流保育の自由遊び場面を中心とした。記録は双方の園児について、それぞれの発信行動と受信行動、視線や様子を補助行動として、録画データからかかわりの生起頻度について計測した。

対象：A聾学校幼稚部2名(C児：3歳男、D児：4歳女)

教員2名

※男児は右人工内耳、左補聴器

女児は両耳補聴器

B保育園園児10名

保育者1名

調査期間：初回 2013年6月～8回 保育園3歳児級

C児、D児

2014年7月～12回 保育園4歳児級

C児、D児

2015年6月～14回 保育園異年齢混合

C児

【結果】

1. かかわりの生起頻度について(初回の様子)

初めての交流であるため双方が慣れるように触れあい遊びを取り入れた。C、D児と園児がペアになって歌遊びを行った。D児は笑顔で楽しんでいたが、C児はペアの園児が触っていても表情を変えることがなかった。ペアを替

て2度実施したが触れることもなかった。また園児は触わる程度で歌が終わると直ぐ離れてしまった。双方が恥ずかしさや困り感を持っていることが伺えた。その後、自由遊びでは、ままと、病院ごっこ、机上あそびを繰り返していた。「病院ごっこ」は構成メンバーを替えて3回実施しており、発信行動の頻度を図1に記した。

病院ごっこ	1回目					2回目					3回目								
	C	D	保女児1	保女児2	保男児1	園T	C	D	保女児1	保女児2	保男児1	園T	C	D	保女児1	保女児2	保男児1	園T	
C																			
D																			
保女児1																			
保女児2																			
保男児1																			
園T																			

図1.病院ごっこに見られる発信行動

メンバーが少ないため、1対1の発・受信行動が見られた。

D児からの発信が多く見られたが、「ままと」では女児5人の集団であった。園児は自分たちでストーリーを展開していたが、D児への発信はなく、D児からの発信もなかった。同一の場の共有と個々に模倣を楽しんでいたにとどまった。

2.2年次目の様子(双方の保育者の記録より)

園児はかかわり方について理解出来ることが増え、昨年より積極的にかかわっていた。C児も保育者に聞きに来る姿が増えた。園児間ではC児・D児ともに発声することが増えたが、不明瞭で聞き取れないことが多く、やり取りには難しさが見られた。一方、仕草や動作で説明し、伝えようとする園児も出てきた。しかし、ルールの理解や経験の少なさなどでは必要に応じて保育者の仲立ちも考えたい。全体的に関わりを持つというより、まだ同じ空間で遊んでいる感じである。

3.交流保育を通した園児の変容(3年次)

交流対象児の卒園、保育形態の変化があり新たな課題が出てきた。ポスターにて掲載

※4年を経過し、現在も交流保育は実施されている。

【考察】

交流保育では障害のある幼児の育ちがクローズアップされがちであるが、かかわる園児の育ちを保障することもインクルーシブ保育である。交流保育の場は双方の幼児が共に育ち合う活動を考へて実施されてきた。自由遊びに視点を置くことは、園児の様々な思いに触れ、相互のかかわりから変容の知ることが出来る。園児のかかわりには保育者の介入も必要とする場面も多く難しい側面があるが、回数を重ねる毎に園児自らが気づき、かかわろうとする姿が現れてきた。これは障害理解教育へのアプローチでもある。園児のみならず保育者の学びも多く、今後も継続していく意義は大きいと考える。

【文献】

池坂麻里子(2012):障害がある幼児と他児とのかかわりの諸課題 Educare 第33号,41-46.

大原重洋、廣田栄子(2012):聴覚障害幼児における聴児との社会的遊びの発達の変化と関連要因の検討 音声言語医学会誌 第53号,319-328.

大塚明敏(2002):聴覚障害幼児に対する遊びの指導について 長野大学紀要第24巻第1号,9-30.

(HARAKO Harumi)